

◆第1話◆ 活字ばなれ 文字ばなれ

「活字ばなれ」という風潮が染み渡って、ずいぶん経つ。こう言われ始めたころは、まだ鉛合金製の活字が使われていたのだろうか。

出版界、印刷業界では、平成4年を契機に一気にホットからコールドへと移行が進む。つまり、活版から写真植字へと大転換が起きた。

書籍の生産方式は、大きく転換したが、製品上は日本語表記に使用する「文字」が、すなわち漢字、平仮名及びカタカナが並んでいる。それは、今も変わらない。

では、なぜ「活字ばなれ」が進んだと言うのだろうか。なぜ「文字ばなれ」と言わないのだろうか。

活字が廃棄されて、何が勃興してきたかといえば、電算化の流れである。Windows（我が国ではWindows 3.1）がパソコンOS（Operating System）となり、平成7年には、Windows95がリリースされるやパソコンブームが起こる。ライバルのAppleがmacOSで対抗した。そして、IBM社は、パソコン仕様として「PC/AT互換機」（DOS/V機ともいう）を提案する。これは、IBM仕様というべきものであり、取り込みを狙ったともいえる。しかし、賛同したメーカーは、IBMが想定したよりも大きなうねりを発生させる。生産は、部品ごとに専門メーカー化が進んだ。パソコン製造は、部品メーカーと組み立てメーカーに分化、各社ハードウェアの共通化が進み、Windows95が標榜する「マルチベンダー、マルチタスク」（いつの間にか「マルチベンダー、マルチメディア」になった）が実現するようになった。この結果、8ビットマシンで一世を風靡したAppleをMicrosoftが凌駕するようになる。PC/AT互換機のOSを担ったのがマイクロソフト社であった。その後、マイクロソフト社からWindows NTというNOS¹機能を兼ね備えたサーバOS及びクライアントOSがリリースされると、いよいよOffice Automation（事務業務の改善）が現実味を帯びることになる。クライアントサーバ型パソコンネットワーク（Local Area Network）の普及である。WinNTの兄弟OSがIBM社の「OS/2」である。AppleのMacintosh（mac OS）は、デザイン現場に活路を見出してシェアを確保している。この発展系として携帯端末（携帯電話からスマートフォンやiPhone）が普及してくる。そうして、万年筆やボールペンそして鉛筆を使って文章を書くことが激減する。手紙を書くにもMS Wordなどを利用するようになる。電子機器の浸透とか普及とか言って、これが誉めそやされる。こうして、考えながら文章をしたための作業は、忘れ去られることになる。携帯端末のドット文字は日常頻繁に見ている。携帯端末とさほどサイズの異なる文庫本の文字は見ない、という風潮になる。これに拍車をかけたものに電子書籍がある。これは、残念と言えば残念なのだが、大きく伸長することなく横ばいのようなものである。ここから見えることは、本ばなれ活字（文字）ばなれが起きたのは根気がなくなってきた証しと言えないだろうか。人の心に余裕が失われたことにより、「本」を開いて字面を追うという作業が困難になった。これが世間で言われる「活字ばなれ」の正体なのではないだろうか。所詮、人間はアナログである。決してデジタルにはなじまない。0と

¹ 「NOS」とは、Network Operating Systemのことである。当時、ノベル社のNet wearが最大シェアを誇っていた。

1 或いは右か左か方式で思考してみてもいつか第3の選択肢を必要とする時がある。簡単に割り切れることばかりの世の中でないことが理解できるようになれば、「スマホ人間」たちも気づいて、「本」から情報や知識を得るようになることだろう。レポート執筆にあたって参考文献から引用部分を転記する作業は、文献を読まなければできない作業である。少なからず、「読書」をすることになる。また、「書く」という作業は、文字を覚えることにつながる。筆記することが減ると文字を忘れがちであることを認識している向きは、多いだろう。

大学は、まずレポートをタイピングから自筆に変えたら如何か。「コピペ」が消滅する。学生は、レポート執筆に際し、文献に当たらざるを得なくなると思うが如何に。